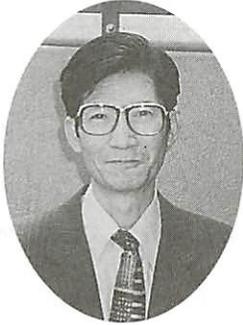


堀田さん逝く

—生物進化の研究者・教師である輩への追悼—

真野 勝 友 (筑波大学学校教育部)



東京経済大の堀田進さん(経済学部教授)が亡くなった。56歳の誕生日を迎えて間もない11月1日早朝のことだった。肝不全によると言う。当日の朝、大学関係者から電話を受け、取るものも取り敢えず、遺体が安置されているという国分寺の東福寺に急いだ。途中電車の中で、彼の元気だった頃のことを次々と思い出されていく。

何といってもまず頭に浮かぶのは、彼と一緒に行った動物園見学の時のいろいろな光景である。これは動物園を生物進化の普及の一つの方法として活用できないか、というところから始まったことなのである。「動物園はレリックの宝の山」である、といった少々過激なまでの思いで始まったと思う。当時、すでにダーウィンの「種の起源」は何度か勉強していて、そこから化石だけでなく、現生の生物を通して生物進化の証拠を探る事が出来るという頭の中での理解はしていた。

化石よりも親しみやすく、より分かりやすい生き物(レリック)を材料にした進化論の普及をするのもいい方法であるとは井尻正二さんなどが解説しており、その実行動として動物園見学が始まった。その後、堀田さんはこの動物園見学を生物進化の勉強の必修なものへと定式化していったのである。

その後の彼の活動*1を見ればその様子は一目瞭然である。その成果は東経大での学生の大動員でもよくわかる。更に、新聞などの一般紙による読者対象の行事にまで発展させていったことはよく知られている。彼の主宰する「レリックの会」は学生を中心に拡大していった。若い学生はいわば「生物進化の普及」の戦士(軍団?)のような存在であった。

現在動物園は野生生物の保護に関連してさまざまな重要性が指摘されているが、生物進化という学問的なことを分かり易く子供たちや一般の人たちにも教えることが出来るのも動物園であると言うことを、その当時から、指摘し、長年実行し、成功したのは彼であると言ってもいいのではないだろうか。その意義は今でも変わらない。今では、各地で動物園と進化を結び合わせた見学会が行われているのを見ればそれもよくわかるからであろう。

彼の業績はこれだけではない。化石からアミノ酸を抽出し、地質時代における化石の中のアミノ酸の残存量の変化をいち早く指摘したのが彼である。地質学の卒論を野外の地質調査から室内にこもっての有機物分析に取り組んだのは彼が最初(1964)である。彼の母校、今は無き東京教育大学地質学鉱物学教室でのことである。いろいろ難しいことを言う先生方からの注文をクリアーし、この卒論がうまく行ったので、その後、続く後輩たちの大きな励ましとなったことは言うまでもない。その後も化石のアミノ酸分析を続け、分析法の開発にも乗り出し、赤外線による分光分析法を導入し、成果を上げている。*2その過程で生涯の友、信子夫人を獲得したのである。彼の一生の最大の成果であることは後の彼の言を待つまでもない。こうした研究活動は当時の古生物学の近代化の第二波の波頭に彼自らが立って学界に乗り入れた時期である。彼の進取の気性というか積極性はうまくその時の時流に乗っていたのである。それは秋山雅彦氏(現信州大学教授・日本地質学会会長)や藤原隆代氏(故人)などの良き先輩、信子夫人、氏家良博氏(現弘前大学教授)、阿部芳男氏(元プリストル万有(株)研究員・現阿部商事(株)社長)や佐俣哲郎氏(現麻布大学助教授)などの優秀な後輩を得たことが言えるだろう。しかし時が彼を得たと言うどころか、彼がその時流を捕らえたのだと思う。その時の状況をきちんと捕え、まじめにそれに対応しようとし、多くの場合それに成功し、今日に至っていた。

最近の彼の大学での仕事はこういう過去のことだけを知っている大先輩・同輩の諸氏には理解しかねることかもしれないが、ランドサットによる映像解析を手がけ、学生の前頭に立ってその利用法を伝授し、野外に出かけてはその分析結果をチェックするというオー

ソドックスな手法、しかも地質学的には正当な手法をも忘れずに適応しながら研究をスタートさせていたのである。この成果を環境問題に適用する狙いを持っていた。地域の問題にこの手法を応用し、着々とその成果を積み重ねている矢先であった…彼の死は、真摯に事に臨む彼の学究的態度に誰も異論をはさむものはないだろう。

一方、若い古生物の学徒にとっては彼のこれまでの状況をよく知っているということでもないの、これは小生の我田引水のように受け取られるかも知れない。だが、彼が時と状況に応じて自己の最大限の知識と努力を総動員して問題に取り組むことで、その事の解決につないだ人だと言うことを分かって貰えばそれで十分であろうと思う。彼は彼の置かれた文科系という大学で積極的に地学、古生物学研究と教育に取り組んでいたのである。

しかし、この間にも病魔は忍び寄っていた。特に最近では彼の体力は他から見ても分かるように力なく痛々しく見えた彼の大学の同僚は言う。しかし、これまで何度かの危機を乗り越えた過去の経験からか！最近の身の衰えもあまり意に介しなかったようである。たとえ一時は健康を損ねても、間もなく快復すると言う自信のようなものを持っていた。だから、決して何かをやり急ぐということもない様子であった。だから体調の快復を今か今かと待っていた節が伺える。だから、最後に彼と会ったときの話ぶりは穏やかで、以前と変わらないものであった。ただ、夏休みに入った7月終わり頃に、学生をフィールドにつれていった後に引いた風邪が治り切っていない自分の健康には大変注意深くになっていた。

堀田さんは今、冥土への道すがらどこかで化石の採集でもしているのだろうか。その度に写真をとって、カメラを構えるに違いない。知る人ぞ知る彼はカメラのマニアなのである。その始まりは高校時代の写真コンテスト入賞から始まったようだ。何度かの入賞を経て彼のカメラ好きは定着したようである。彼の写真のアンゲルは他の人と少し違っているところがあったのを覚えている。そして、東経大に行ってから再びカメラの芽が萌え出したのだろうかと思う。あるいはまた、パソコンを使って、ランドサットからの映像を見ては、現世の環境の汚染を見ては憂えているのであろうか。ほらあそこに断層があるじゃないかと指さしているかも知れない。

きっと、天井のほうが我々よりも社会や自然環境の変化や将来をよく見通せるかも知れない。そうだったら、e-mailでもいいから我々に教えてくれないかな。

堀田さん頼むよ。因みに、小生のe-mailはmanokatu@sakura.cc.tsukuda.ac.jp

改めて、ご冥福をお祈りいたします。合掌…以下に堀田さんの主な業績を記します。紙面の都合で一部に限らせていただきます。

* 1 : [生物進化関係]

A. 動物園関係

- ・動物園で学ぶ進化. 1978, 東海大学出版会, 242p. (共著)
- ・続・動物園で学ぶ進化. 1984, 同上, 177p. (共著)
- ・動物園見学ハンドブック. 1991, 同上, 156p. (共著)

B. 生物進化一般

- ・地球生物の進化. 1975, 文化書房博文社, 170p. (単著)
- ・地球の歴史24講. 1989, 東海大学出版会, 254p. (単著)
- ・生きている化石. 1991, 築地書館, 239p. (共著)

* その他多数の著書あり

* 2 : [研究論文]

- ・タマキガイに残存するアミノ酸. 1965, 地質学雑誌 vol. 1, 71, 554-566.
- ・ナウマン象歯の組織学的・生化学的研究 (その1). 1960, 化石研究会会誌No. 1, 49-58.
- ・現世及び化石ウニの殻体から検出されアミノ酸. 1968, 地質学雑誌, vol. 74, 159-164.
- ・化石タンパク質の構造—ナウマン象の臼歯象牙質を構成するタンパク質の赤外線吸収スペクトル—. 1968, 地球科学, vol. 22, No. 4, 179-185.
- ・Infrared Spectra and Conformation of Protein constituting the Nacreous Layer of Molluscan shell. 1969, Earth Science Jour., vol. 23, No. 4, 133-140.
- ・The Study on the Compositions and Conformations of Organic Substances constituting Molluscan Shells in Relation to their Calcification and Fossilization. 1970, Doctor Thesis, Tokyo University of Education, Science Section.
- ・コウイカ (*Sepia esculenta*) の殻体を構成する有機物質. 1975, 地球科学, vol. 29, No. 3, 111-116.
- ・頭足類の蓋の有機物質 (1) 赤外吸収スペクトルによる検討. 1980 東京経済大学「人文自然科学論集」第56号.

* その他多数の論文あり。